

# バクーからタブリーズへ注ぐまなざし

ふたりのソヴィエト・アゼルバイジャン語詩人にみるワタンの再定義

石井啓一郎

## I. はじめに

本稿はアゼルバイジャン語現代文学を代表するふたりの詩人サマド・ヴルグン (Səməd Vurğun, 1906 - 56) とバフティヤル・ヴァハブザダ (Bəxtiyar Vahabzadə, 1925 - 2009) の文学的発信を基盤として、現在のアゼルバイジャン共和国で想起される「祖国(ワタン)」<sup>1</sup>像のソヴィエト時代における形成に遡って考察する。そのワタン像は、隣国イランの社会文化的な存在感と影響力から、民族集団として自らの独自性を切り取り異化するうえの自己認知の過程とも考えられる興味深いものである。本稿ではとくに広義でイランと関連する要素を視野に、アゼルバイジャン人のワタン意識の一端を検証したい。

## II. 「アゼルバイジャン」をめぐる若干の前提

塩野崎信也氏の浩瀚な研究<sup>2</sup>で証せられるように、領域という地理的な概念として、また民族、国民を統合する概念として、いずれにおいても「アゼルバイジャン」は自明の概念として規定するのは難しい。本稿の目的においては、便宜的に現在のアゼルバイジャン共和国と、イラン・イスラーム共和国の国境にほぼ一致するアラス河<sup>3</sup>を挟んで、

- (1) その北に位置し現在のアゼルバイジャン共和国に相当する地域を「北アゼルバイジャン」と称し、
- (2) その南に位置し、現在のイラン・イスラーム共和国の行政区画上、北西部の東

---

<sup>1</sup> アゼルバイジャン語で「祖国」はアラビア語の *watan* と共通する *vətən* である。本稿中ではカタカナ「ワタン」の表記で統一する。

<sup>2</sup> 塩野崎信也『<アゼルバイジャン人>の創出 民族意識の形成とその基層』京都大学出版会、2017年。

<sup>3</sup> アラス河はアゼルバイジャン語では「アラズ (Araz)」の表記が大勢であるが、本稿では英語、ペルシア語、トルコ語などで広く通用する「アラス」の表記にあわせた。本稿で言及する作品中の固有名詞はアゼルバイジャン語表記を原則とするが、イランの固有名詞で日本における一般的な認知の度合いがペルシア語のほうがより高いと思われる場合はペルシア語表記を優先している。

アーザルバーイジャン州、西アーザルバーイジャン州、アルダビール州を包含するいわゆる「アーザルバーイジャン三州」を「南アゼルバイジャン」と称する。ただし、例えば「アゼルバイジャン・ソヴィエト社会主義共和国」のように、具体的な国号（歴史的なものも含む）等を特定して言及する必要がある場合は、それを優先する。

「アゼルバイジャン」が、南東コーカサスにあって、ある国民と領域の「ワタン」を表象する名前になったのは、1918年に成立して短命に終わったアゼルバイジャン人民共和国<sup>4</sup>の成立以後である。

アゼルバイジャン人民共和国が成立した際に、その国家元首の地位に就いたマハンマッド・アミン・ラスールザーダ（Məhəmməd Əmin Rəsulzadə, 1884-1955）の著作から、地理的呼称と、新たな民族的呼称としての「アゼルバイジャン」を当事者がどのように整理したかが窺える。このテュルクの新生国が「アゼルバイジャン」の名を冠したことは、当時のイランにおいて汎トルコ主義への警戒と懸念を引き起こしているが<sup>5</sup>、これに応じてラスールザーダが1919年4月28日付『アゼルバイジャン』紙に執筆した『アゼルバイジャンとイラン』（Azərbaycan və İran）という記事に着目してみたい。

彼は「イランの新聞によれば、ガフガスイヤのなかに建国した我らの国に、アゼルバイジャンの名を冠する権利はないという。この名は古くからのイランの州（əyalət ペルシア語 eyālat）として知られたアゼルバイジャン<sup>6</sup>の権利である、という」とイラン側の懸念にまず言及する。そして南東コーカサスの「アゼルバイジャン人」の呼称は、地理的(coğrafi)なものであるより、民族的(qövmi)なものであるとして、

「アゼルバイジャン」とは世界にひとつだけある領有地ではない。むしろアゼルバイジャンとは集団(cəməət)であり、その集団は独自の言葉を話すひとつの民(millət)である。友なるイラン人は、その民を「ガフガーズのトルコ人ムスリム」と呼んで

---

<sup>4</sup> 日本語では「アゼルバイジャン共和国」「アゼルバイジャン民主共和国」の複数表記が存在するが、アゼルバイジャン語の Azərbaycan Xalq Cümhuriyyəti の原語からみて正確なのは「アゼルバイジャン人民共和国」である。

<sup>5</sup> Touraj Atabaki, *Azerbaijan, ethnicity and the struggle for power in Iran*, Tauris London, 2000, p.25  
八尾師誠『イラン近代の原像～英雄サッタール・ハーンの革命』東京大学出版会、1998年、pp.148-9.

<sup>6</sup> 八尾師 前掲書、pp.130-1. ガージャール朝期にはアゼルバイジャン州は、その秩序と安全はイラン全体の安寧にとって切実な問題となっており、アゼルバイジャン州の中心都市タブリーズは王位継承者所在地としてその管轄下に置く、あるいは時期によっては州や準州より格上の「藩国」と位置づけられるなど、重要視されていた。

いる。(……) アゼルバイジャン人という表現を「ガフガーズのトルコ人ムスリム」と同義で遣うことは、地理的な視点からは否定し得るであろう。しかし民族的視点から否定することは不可能である。イエレヴァン、ギャンジャ、バクーの県 (quberniya) にいる「トルコ人」と、アルダビール、マラーゲ、ハルハール、タブリーズとガラジャ・ダグの諸地域に居住する「トルコ人」とを異化して隔てる根拠が私にはわからない。同じ言葉、同じ慣習、同じ信仰、同じ伝統がここにあり、他方に統治者がある。その狭間には新たな生活、政事とともに百年の営みに資するもののみが在る。

「ガフガーズのトルコ人ムスリム」と「イランのトルコ人ムスリム」などより、さらに認知された名がある。それが「アゼルバイジャン・トルコ」である。<sup>7</sup>

「アゼルバイジャン」の厳密な地理区分を定義するのは難しい。たとえばイラン北東部と南東コーカサスにおける「アゼルバイジャン」の北限はアラス河かキュル河かをめぐっても、数多くの地理書に異同があり一律に規定はできない<sup>8</sup>。しかし(雑な捉え方になるが)歴史的に「アゼルバイジャン」に属するとされてきた具体的な都市名から導き出せば、それはタブリーズ、マラーゲ、ミヤーネ、サラブ、アルダビール、アハル、オルミーエ、ホイなどを包含し、現在のイラン・アゼルバイジャン三州の領域に合致する。さらに上に引いたラスールザーダの執筆から、当時のイランも、そして当のアゼルバイジャン人民共和国建国の指導者も、地理概念の「アゼルバイジャン」はアラス以南のイランに帰属する地名であるという認識では一致していたと言える。ラスールザーダはそのうえで、アゼルバイジャンとは斯かる地理概念に限定を受けず、アラス河の南北に遍在する民族・言語の概念であると主張している。

アゼルバイジャンに広く受容される「民族のワタンがふたつに裂かれている」という歴史認識の直接の起点は、帝政ロシアとガージャール朝ペルシアの二度にわたる戦争の終結にあたって、ペルシアがコーカサスの所領をロシアに割譲したゴレスターン (1813年)、トルコマンチャーイ (1828年) 両条約であり、その結果として生じた「分断」の境界はアラス河である。

---

<sup>7</sup> Məhəmməd Əmin Rəsulzadə, *Əsərləri*, 5-ci cild, Təhsil, Bakı (2014) p.239

<sup>8</sup> 詳細は塩野崎 前掲書、pp.63-80 を参照。とくに 78 頁と 79 頁の表 12、図 39 に解り易く視覚的に整理されている。

そして歴史的な地理概念として(概ね)イラン領内北西部の地域を指して来た名称「アゼルバイジャン」を、1918年以後——ソヴィエト時代も含めて——国号に冠称し続けてきたのは、アラス河の北の地域である。

特に現代の北アゼルバイジャンに持続する「南北分断されたアゼルバイジャン」という歴史認識と、その統一回復という政治的(あるいはナショナリズムに則ったロマン的)な願望を主題とする文学的言説を扱ううえでは、それぞれ国としての政体に変貌あれども、上記のとおりアラス河を境界に南北にまたがる「北と南」を帰納的に「アゼルバイジャン」と概括する方法も決して無意味とは言えないと思料し、本稿においては北、南をここに示したとおりに定義する。

### III. スターリン体制下のアゼルバイジャン語詩人サマド・ヴルグン

サマド・ヴルグン<sup>9</sup>は帝政ロシア末期の1906年に、当時のイェリザベトポル県ガザフ郡ユハル・サラフル市——現在のアゼルバイジャン共和国領のなかでもグルジア国境に近い地域——で生まれている。ゴリ師範学校の分校に学んだのち、北アゼルバイジャンがソヴィエトに併合されて以後コムソモールに加入して、勤労奉仕活動のなかで教化活動に従事し、その後にモスクワ大学文学部を経てアゼルバイジャン国立学術研究所(Azərbaycan Dövlət Elmi-Tədqiqat İnstitutu “DETI”)とアゼルバイジャン教育研究所(Azərbaycan Dövlət Pedagoji İnstitutu)で博士号を取得している。1924年頃から詩作を始め、同時にプーシュキンの韻文小説『エフゲニー・オネーギン』、さらにペルシア語古典文学の大詩人ニザーミー・ギャンジャヴィー(ペルシア語 *Nezāmī Ganjavī*, アゼルバイジャン語 *Nizami Gəncjəvi*, 1141 - 1209)<sup>10</sup>の『ライラとマジヌーン』をアゼルバイジャン語に翻訳している。演劇作品も書いており二篇の詩劇『ヴァギフ *Vəqif*』(1938年)、『ファルハドとシリフ *Fərhad və Şirin*』(1941年)はいずれもソヴィエト連邦国家賞を授与されている。晩年にはアゼルバイジャン国立科学アカデミーの副所長を務めている。

---

<sup>9</sup> 本稿中に引用するヴルグンの作品はすべて *Səməd Vurğun Seçilmiş Əsərləri Şərq-Qərb Bakı* (2005)の5巻の本に拠る。和訳は特段の断りがない場合は筆者による。

<sup>10</sup> 北アゼルバイジャンのギャンジャで生涯を過ごしたと言われる。ニザーミーは雅号で本名はイルヤース・ビン・ユースフ *İlyās b. Yūsuf*。『神秘の宝庫』『七王妃物語』『ホスローとシーリーン』『ライラとマジヌーン』『イスカンドルの書』から成る「ハムセ(五部作)」はペルシア語古典文学の至宝として愛され、フェルドゥースイー、ルーミーと並びペルシア語古典文学の三大叙事詩人に数えられる。

ヴルグンはロシア革命をリアルタイムで知り、その後スターリンの大粛清、第二次世界大戦から冷戦という一連の流れのなかの激動時代を生きた詩人である。彼の詩作のテーマには、ソヴィエトの詩人らしく、社会主義革命の成果、それが前途に創出するであろう自由で民主的な世界への希望的で楽天的な展望、機械文明と科学技術が人にもたらす明るい未来、といった革命文学的なものが数多くみられる。同時に彼は山や大地、花、空、星といったワタンの自然のほか、ニザーミー、ムハンマド・フズリ (Məmməd Füzuli, 1494 - 1556) <sup>11</sup> といった古典詩人の詩的表現や「山を穿つファルハド」<sup>12</sup> のようにフォークロアとして広く親しまれる伝説などを取り入れ、変化に富んだ表現手法のなかにワタンを詠う詩篇を数多く残した。

次に一部引用するのはボリシェヴィキがバクーを制圧してから 20 年の節目の 1940 年に書いた『二十の春 (20 Bahar)』で、これはソヴィエトと合流してもたらされた「変革」「前進」を祝祭的に賛美する一篇である。「ライラとマジュヌン」(アゼルバイジャン語表記はレイリとマジュヌン Leyli və Məcnun) の悲恋物語を踏まえた次の詩句は、広く知られた文学的テーマにソヴィエト的新解釈<sup>13</sup>を施したものといえよう。

レイリとマジュヌンの物語は  
人を泣かせはしない  
マジュヌンは山を、草原を彷徨わない  
愛のおもてが微笑んだ  
    愛の憧憬を見よ  
    讚えよう  
ぼくらの生きる幸いな時を  
真実の言葉に幸いあれ

---

<sup>11</sup> イラクのカルバラー生まれ。ペルシア語詩、アラビア語詩に沿った高踏的なトルコ語詩体(ディーヴァーン詩)のアゼルバイジャンにおける伝統を創った。トルコ語、アラビア語、ペルシア語による詩作を広く残した。

<sup>12</sup> ファルハドはイランの伝説の英雄。ニザーミーの『ホスローとシーリーン』で、王者ホスローと美貌の姫シーリーンを争い、シーリーンを譲る条件としてホスローが求めるまま急峻な断崖を穿って王のための路を造る試練を応諾する物語が特に知られる。多くの文学者の創作欲を刺激する題材であると同時にテュルク、クルドの世界にも広くフォークロア化して流布し、様々なヴァリエントが知られる。

<sup>13</sup> ヴルグンはこの悲恋物語に取材して 1908 年に初演された歌劇(ユゼイル・ハジュバヨフ作曲)に関して『『自由な人間、自由な愛』という問題は、数千年の昔から続く階級社会の歴史のなかで、芸術の天才的創作者たちの心を動かしてきた問題であり、全人類的主题である』としたうえで、「人間性を貶めた階級社会の伝統を厳しく批判したもの」と評論している。Vurğun, 5-ci cild, p.179

ニザーミーに傾聴しよう  
「祖国は幸福になった  
我が愛しきもの  
生まれついでたの言葉は  
追想の手から命を取り戻し  
私は新たに世界へやっけて来た」<sup>14</sup>

同時に、アゼルバイジャンを「ワタン」という視点からみると、この詩のなかには南アゼルバイジャンの古都タブリーズに向けて「ぼくらは、父も母も同じ／ぼくらの心、ぼくらの愛が離れることはない／ぼくは自由になった、ぼくの名もまた春／お前の心にはビュルビュルが泣いている」と呼びかける。ヴルグンは、タブリーズをアラス河の向こう側にある「失われた片側」として哀惜の想いを開陳する。またイランがアラブに征服された後、南アゼルバイジャンのカレイバル（現イラン・東アゼルバーイジャン州）の山城に籠って実に20年にわたってアッバース朝と闘って敗れ、カリフ、アル＝ムタシムの命で838年にサーマッターで処刑されたバーバク・ホッラムディーン（ペルシア語 Bābak Khorramdīn アラビア語 Bābak al-Khurrāmī）の名を、「圧制」に抵抗した民族の英雄として挙げてている。しかし、この詩のタブリーズは、一義的には赤旗のもとに団結する諸国民による反帝国主義的闘争によって解放すべき対象である。

お前の堪えた痛み、苦悶、責苦は  
お前に明るい日からの吉報をもたらしはしない  
臥した眠りから頭を挙げよ  
立て、妹よ！お前の正義は自ら望め  
立て、誓え、バーバクの墳墓の上で  
新しい、明るい日に向けて、諸国民に声をかけるのだ  
太陽の色をした赤旗の下に友誼を結べ  
お前の声に応じて諸国民は立ち上がる  
自由への愛をもってお前は叫びを上げた  
(……)  
母の心を、母の言葉を  
あの敵の手からお前自身の手に取り戻せ

---

<sup>14</sup> Vurğun 2-ci cild, p.38

薔薇の頬をもつ春がお前の額に口づけせんことを<sup>15</sup>

#### IV. ソヴィエト・アゼルバイジャンにおける「ワタン」の政治的再定義と文学

ヴルグンの時代は、ソヴィエト連邦構成共和国としてのアゼルバイジャンにおいて、ワタンを再定義した特徴的な時代であった。彼が創作活動を本格化しだした 1930 年代は、ソヴィエトでコレニザーツィア (коренизация)<sup>16</sup>といわれる民族政策が進行した。コレニザーツィアとは端的には「反ソヴィエト的な民族主義の成長を防ぐために、民族自治を上から促進する逆説的な民族政策」という表現が適切であろう<sup>17</sup>。社会主義のイデオロギーに謳う抑圧からの解放という視点では、民族自決の要求は無視できないが、かつて民族自決が国の解体につながったオスマン帝国やハプスブルクの二の轍を踏むことは避けたい。その意味でソヴィエトは民族自決の装いを整え、ナショナリズムの暴走に先手を打っている。上から民族自決を演出し、連邦構成共和国は、その歴史を含めた民族アイデンティティを象徴するものの創出を鼓舞された<sup>18</sup>。

このプロセスは悪名高いスターリンの大粛清と同時代に進行していた。もとより階級闘争を基軸とするマルキストのなかで「ナショナリズム」は、ブルジョアジーの反革命的策動であるとして危険視され攻撃の対象であり続けている。従来の言語を拠り所にしたアイデンティティの表象は、特に隣国に民族国家を標榜するトルコ共和国が成立した状況下では、ソヴィエトの領域を離れた広域的な繋がりを意図する汎トルコ主義への強い嫌疑をかけられる危険を孕んでいた<sup>19</sup>。加えて非ロシア系連邦構成国の国史創出において奨励されたマスターナラティヴが求める「太古から繁栄した文明の歴史」のクライテリアに沿うなら、アルメニア、グルジア及びイランのように民族、文化の一貫した(と

---

<sup>15</sup> Vurğun 2-ci cild, p.41

<sup>16</sup> ロシア語で「原住の、古来の」という意味で遣う коренной (例えば「原住民 коренное население」) から派生している。indigenization (Terry Martin *The Affirmative Action Empire – Nations and Nationalism in the Soviet Union, 1923-1939*, Cornell University Press (2001) p.10) あるいは「土着化、現地化」(半谷史郎「ソ連の民族政策の多面性—「民族自決」から強制移住まで」宇山智彦編『ロシア革命とソ連の世紀 5 越境する民族と革命』岩波書店、2017年、p.72)

<sup>17</sup> 宇山智彦「総説ユーラシア多民族帝国としてのロシア・ソ連」宇山智彦編『ロシア革命とソ連の世紀 5 越境する民族と革命』岩波書店、2017年、p.23.

<sup>18</sup> 半谷 前掲論文、pp.72-74.

<sup>19</sup> 同上、p.86 参照。従来のコレニザーツィアの基調となる動きが止まることはなかったが、大粛清から大祖国戦争の時代にかけて、ロシアの中心性・優越性を前提とした多民族性の意識、外国とのつながりの敵視、が肥大化して前面に出てくる。Qəzənfər Rəcəbli *Azərbaycan Tarixi, Elm və Təhsil Bakı* (2013) p.363

考えられる) 歴史を誇る隣接圏との比較において、アゼルバイジャンのテュルク化の歴史はせいぜい西暦 11 世紀以後であり、エスニシティを抛り所にしたワタンは見劣りした。

結果としてアゼルバイジャンは、エスニシティ・言語から「領域そのもの」にワタンの基軸を切り替えた。アゼルバイジャンの歴史はテュルク化のはるか以前、前 612 年にアッシリアを滅ぼしてから前 550 年にアケメネス朝に併合されるまで古のイランを支配した王国メディア<sup>20</sup>に遡る。以後幾多の文明の興亡の舞台となった領域そのものが「アゼルバイジャン」である、という認識が形成された<sup>21</sup>。この文脈で、ペルシア古王朝の拝火教(ゾロアスター教)に則る祭政の要地や拝火神殿跡が南北アゼルバイジャンの点在することに関連づけて、拝火教の開祖である思想家ゾロアスター(アゼルバイジャン語 ザルデュシュト Zərdušt)の宗教的形成の地は「アゼルバイジャン」にあり<sup>22</sup>、拝火教の根本經典集の総称であるアヴェスターが「アゼルバイジャン文学」の始点であるといった、現在にも北アゼルバイジャンで広く認知される歴史認識が生まれている。ヴルグンも、拝火教哲学と現代世界にも多くの信者を要する宗門とを産み出したのは「火の国アゼルバイジャン」であると語り<sup>23</sup>、多くの詩に「アゼルバイジャン」の先達としてのザルデュシュトの名を詠んでいる。

## V. 大詩人ニザーミーの「アゼルバイジャン国籍化」とヴルグン

この領域論の文脈で 1930 年代にイランのフェルドゥースイーやハーフェズと並び称すべきペルシア語古典文学の大詩人であり、北アゼルバイジャンの領域内にあるギャンジャで一생을過ごしたニザーミー・ギャンジャヴィーを、いわばイランからアゼルバイジャンへ repatriate する、即ち彼にアゼルバイジャンという「国籍」を割り当てるに至ったのもこの時期である。特に 1941 年、詩人の生誕 800 年を前に、ヴルグンもニザーミーの名を「祖国の誇り」として多くの作品中で称賛し、また彼をアゼルバイジャンの英

---

<sup>20</sup> 日本オリエント学会編『古代オリエント事典』「メディア」の項による

<sup>21</sup> Edmund Herzig « Editor's Introduction : Berthels, Nizami and Azerbaijan », introduction to *The Great Azerbaijani Poet, Nizami – Life, Works and Times by Evgenii E. Berthels*, Girgamesh Publishing (2016) p.19-20

<sup>22</sup> 「ゾロアスター教」「ゾロアスター」「アヴェスター」については『古代オリエント事典』の各項による。なお同事典に拠れば、ゾロアスターの出自が東イランであるのはほぼ確かだとあり、アゼルバイジャンではない。

<sup>23</sup> Vurgun, 5-ci cild, p.120

傑として論じる評論を多く書いている。アゼルバイジャンの領域に生まれた「トルコ人」と想定されるも、生涯、作品のすべてをペルシア語で書いたニザーミーは、コレニザーツィアの枠組みで非民族主義的、非ナショナリスト的ワタンを再定義するうえで適したシンボルであった。

ここにヴルグンのニザーミー論から、いくつか特徴的な論説を紹介したい。

ヴルグンはニザーミーを「アゼルバイジャンの愛国者(vətənpərvər)」として語っている。民衆(xalq)との親密な結びつきが、彼の詩の深い国民的性格の基礎を形成している、という意味での愛国である。ニザーミーはアゼルバイジャンのフォークロア、口承の民間伝承、民話、伝説を基本にして作品を書く民衆詩人であり、宮廷詩人という生き方を峻拒したと述べている<sup>24</sup>。アゼルバイジャン民衆との親密さという意味での「愛国者」として彼を語る際、それがニザーミーの個としての性格のみに拠るものではなく、詩人が帰属する民衆の高貴な精神性によるとしている。ヴルグンのニザーミーに関する記述には、このような階級闘争的な歴史観を背景にして「平民、民衆」を倫理的な善であると先験的に位置づけた論述が散見する。たとえば『七王妃物語』の有名なバフラムと羊飼いのエピソードに関する、次のような記述のごときは、あきらかな原作への過剰な脚色がある。

才気溢れるヒューマニストのニザーミーは率直に熱烈に民衆の勤労と勇気を賞賛した。詩人は封建的貴族に対して鋭い嫌悪の念を抱いている。無慈悲で、残虐で、欺瞞に満ちた彼らを筋道だった筆致で告発し、勇敢に声をあげ封建的な隷属に抵抗した。率直な民の苦しみ、希望と望みともに満ちし、また伝えてきた。ニザーミー自身が、英雄たちを民衆の内側から選んだことは決して偶然ではない。

ニザーミーは『七王妃物語』の詩では、王統の承継によらず、勇敢さとの惜しみせぬ鷹揚ゆえに王座にのぼったバフラム・シャーを主人公として創作した。バフラム・シャーは人民に善を為した。しかし貴族たちは彼が敵国の篡奪者に屈するようと姦計をめぐらせる。バフラムはそれを知り、陰謀者たちに戦いを挑む一方で、大地と勤労に篤実なものたちの忠義と誠実を信じ、町々を頼みにした。彼は強大な侵略者の軍勢に勝利する。その後、バフラムは、飼い犬を吊るした羊飼いを識る。犬は主人を裏切り、牝狼に欲情していた。バフラムは羊飼いに教訓を得て、敵国と通謀した裏切り者の宰相を処刑させる。バフラムは自ら羊飼いに王冠を与え『民を治めるのは、最も知性と叡智に長けたものであるべきだ。お前の知恵は私に優り、

---

<sup>24</sup> Vurğun, 5-ci cild, p.285

それゆえ、私ではなく、お前こそが牧人の王たれ』そしてこの時から労働者である羊飼いの王の荣誉が全世界で謳われるようになる。<sup>25</sup>

一方でヴルグンはニザーミーを「ナショナリズム *millətçilik*」とは無縁であるとし、アゼルバイジャン人、イラン人、アラブ人、スラヴ人、エジプト人、インド人、ギリシア人など、民族、人種にこだわらず、善良な労働者階級に等しい愛情をもって詩のなかに描いている、と評する。その意味でニザーミーの詩は、帝国主義の卑劣なプロパガンダに抗する今日の人類普遍の闘争において、我らの親密な支援者である、と論評する<sup>26</sup>。

ヴルグンはニザーミーが「トルコ語」ではなく、ペルシア語で作品を書いた理由は、アゼルバイジャンに対する征服者、支配者の宮廷言語であったペルシア語の使用を強制されたからであると断言する。

シルヴァンシャーの暴君アフスイタンはニザーミーを母語から遠ざけていた。詩人はこの侮辱するような暴君の命令を自らの詩のなかに記している。「ニザーミーよ、我らはお前の書くものをよく知っている。しかし弁えるがよい。誰の幸せ、誰の喜びのために、真珠を美しい宝石箱からすすんで顕示したのか。お前のトルコ語は我らに相応しくない。我らの宮殿は蒙昧の風習に馴染んでいない。我らは高貴で、高德の身。我らは高貴の言葉を聞くべきだ」<sup>27</sup>

これはニザーミーが『ライラとマジユヌーン』の序として詠んだ一連の詩篇のうちで、依頼者であるシルヴァンシャー朝の王アヘスターン（Akhestān, Jalal-al-dīn Abu'l-Mozaffar b. Manūchehr）からの作品への数多い要望を前に詩人が一旦はどうしてよいかわからず途方に暮れた、というくだりで言及したもので、必ずしもトルコ語を卑しめるものと解することはできない。上に述べたとおり、ヴルグン自らがニザーミーの『ライラとマジユヌーン』をペルシア語からアゼルバイジャン語へ自ら訳出しており<sup>28</sup>、管見の限り元のヴルグン訳と原文の間に本質的な齟齬はない。しかし上に引いた論考では、本来原文にない修辞、特にトルコ語そのものを貶めるような悪意ある表現が誇張的に付加されている（例えば上記引用の「蒙昧の風習 *türkəsaya adətlər*」はこの評論での付加的「創作」である）。

---

<sup>25</sup> Vurğun, 5-ci cild, p.34

<sup>26</sup> Vurğun, 5-ci cild, p.287

<sup>27</sup> Vurğun, 5-ci cild, p.32-33

<sup>28</sup> Nizami Gəncəvi *Leyli və Məcnun -tərcümə edən Səməd Vurğun-*, Lider Nəşriyyat Bakı 2004

一方そのペルシア語の強制の意味合いについて、1947年のソヴィエト作家連合協会第11回大会講演の席上ではこうも述べている。すなわちニザーミーにペルシア語で作品を書くことを求めたシルヴァーン朝の王自らが、「ペルシア語が宮廷語である以上に、東方諸国の文学言語としての地位が前提にあった」当時の伝統に束縛されていたというものである。言い換えれば、その強制なるものは、決して征服者と民の支配・被支配の下での強制に限定されず、当時の（かぎ括弧つきの）「東方諸国」に広くペルシア語が占めた地位がしからしめているのだとも謂う<sup>29</sup>。

自らが翻訳に携わって原文を熟知したはずのヴルグンが斯様にニザーミーの言葉を改変したのは、当時の政治の要請に符合していると言えよう。上の評論は1939年の作であるが、同年4月にはウクライナの詩人ミコラ・バジャン（Микола Бажан, 1904 - 1983）の口伝で他ならぬスターリンの言葉として次のように『プラウダ』紙が報じている。

スターリン同志はアゼルバイジャンの詩人ニザーミーについて、詩人の作中の言葉を引用して、友邦アゼルバイジャン人民のこの偉大な詩人がほとんどの作品をイランの言語で書いたというだけを理由に、ニザーミーをイランに譲るべきなどと謂うのは根拠を欠くと反論した。ニザーミーは同国民に、生まれながらの言葉で語りかけることを許されなかった……イランの言語の使用を強制されたのだと、自らの詩のなかに書いている。<sup>30</sup>

## VI. 「ソヴィエト」と「アゼルバイジャン」の狭間のワタン

ペルシア語原典の真正性という視点に立てば、上に引いたヴルグンのニザーミー論には端的にあって不誠実な部分があり、斯かる言説はイラン人からみれば荒唐無稽以外の何でもない。これは圧倒的で猟奇的な力の前に知性、良心をねじ伏せられ、政治の望むまま道化にされた知識人のグロテスクな悲劇であった、とでも言えば、ヴルグンを不誠実の誹りから救い、護るための説得力ある弁論になろう。確かに当時は言論に関わる者が、政治の求める機微な文法と公式から逸脱した表現、発言をすれば、即時文字通り命取りになって不思議のない時代である。また他人の自白証言（拷問を原因とする虚偽供述も含む）や中傷に基づいて身に覚えのない罪状で告発に巻き込まれることも珍しくない時代<sup>31</sup>に、言論人が置かれた恒常的な緊張状態は想像を絶するものであった。その意味

<sup>29</sup> Vurğun, 5-ci cild, p.191

<sup>30</sup> Herzig op.cit., p.24. 筆者は『プラウダ』記事原文は未見。

<sup>31</sup> 1937年10月13日に反革命的策動の罪で銃殺された詩人タルブル(Böyükağa Mirqasım oğlu

で、ヴルグンがタブリーズに象徴される南アゼルバイジャンを包含した「大アゼルバイジャン」的ワタンを詩に詠むとき、南北の国民統合や民族的同一性といった主題を慎重に避け、反帝国主義的民族自決論に同化させる表現を一貫して採ったのは、明らかに粛清時代の禁忌に対する配慮で、自己防衛の例であろう。ヴルグンは例えば『橋の焦がれ Körpünün Həsreti』(1948)という詩にアラス河にかかる橋を主題とし、その上に人の往来がなくなったのは何時からだろうかという問いを繰り返すが、それが概ねこの主題について彼なりに線引きした限界であったと筆者は理解する。

しかし他方、ヴルグンは世界初の社会主義革命を同時代の歴史的偉業と認識し、ソヴィエトの前進的な成果の意味を肯定する詩人でもあった。例えば第二次大戦後の北アゼルバイジャンで展開されたミンガチェヴィルのダム建設とキュル河の治水工事という国家インフラの一大事業に関わる「労働英雄たち」を讃頌する長編詩『ムガン Muğan』(1948-1949年)には、上述の『二十の春』にも通底する、力強い韻律で描く祝祭的な高揚感が横溢している。

上述のコレニザーツィアは確かに逆説に満ちたものではあったが、一方「大民族への同化が歴史の進歩とされ、一つの国家に一つの国民という融合論が世の趨勢だったこの時代にあって、融合を否定して多言語化を誇る」異彩を放つものであり、「今風にいえば『グローバル』一辺倒でも『ローカル』偏重でもない『グローカル』<sup>32</sup>というソヴィエトの実験でもあった。作品を俯瞰すると、ソヴィエトの導きの下でアゼルバイジャンに新たなワタンを実現するという確かな目的をヴルグンは意識しており、コレニザーツィアから続く大祖国戦争時代を通じて、その目的の正当性に迷いを感じさせるものはないと言える。

1941年にヒトラーが東部戦線に戦端を開いてから、ソヴィエトが否応なしに巻き込まれたいわゆる「大祖国戦争（ロシア語 Великая Отечественная война, アゼルバイジャン語 Böyük Vətən müharibəsi）」の時代において、祖国防衛のための戦意高揚を意図した多くの芸術創作がソヴィエトで行なわれた。確かにヴルグンも大祖国戦争下に、当然に連邦構成共和国の各々の上位に被さるソヴィエト連邦という、いわば「大ワタン」の防衛戦争

---

Talıblı)の尋問記録によれば、タルブルはヴルグンを「反革命的ナショナリスト」であると自白証言で名指している。これがヴルグンに累を及ぼすことなく済んだが、ヴルグンを含めてナショナリスト、汎トルコ主義者などとタルブルが挙げた12人のなかにミカエル・ミュシュフィグ、アリ・ナーズム、ヒュセイン・ジャヴィドなど実際に銃殺刑、流刑に処せられた詩人たちが含まれている。Ziya Bünyadov *Qırmız Terror, Qanun Nəşriyyatı Bakı* (2017) p.101-4

<sup>32</sup> 半谷 前掲論文、p.75

を鼓舞するうえで、ウクライナやベラルーシなどとの民族共和国を超えた連帯や「ファシズム」への非難といった、大ワタンの政治的・イデオロギー的テーマに沿った作品も数多く作っている。同時に彼は、「大ワタン」の換喩としての「小ワタン」——「郷土アゼルバイジャン」——への愛国意識を頻繁に喚起しており、その文学的な手法は先行するコレニザーツィアの時期から一貫して明快である。例えば「ロシアの大地で闘うとき、あなたたちが等しく護るのは陽の輝くアゼルバイジャン」と呼びかけ、その闘いで「あなたがたが護るのはニザーミーの墓」と畳みかけるとき<sup>33</sup>、ニザーミーの名は護るべきアゼルバイジャンの榮譽の枕詞であり、また両義的に大ワタンをも想起させる。ワタンの物語としての「征服者、圧制者への抵抗」を象徴する英雄としてシンボル化されたバーバク、コログル<sup>34</sup>などが歴史的事実と無関係に頻繁に愛国的な詩に想起される。例えば当時の代表作と知られる『母の訓示 Ananın Öyüdü』(1941年)は、戦地へ赴く息子への別れに母が与える勇ましい訓示という形で書かれた一篇であるが、そこにも「お国の民にはあまたのコログル、あまたのハタイ<sup>35</sup>／ひとりとして擲弾に斃れる兵はなく、大砲をもって潰えることのない軍勢」<sup>36</sup>の様な、民俗誌を踏まえた愛国的抵抗のメッセージが込められている。

ニザーミー、バーバク、コログル、ハタイ、ファルハド、フズリのような英雄・英傑に帰せられた「物語」と紐づけられた愛国的な詩篇は、原初の国土防衛戦争への戦意高揚という時代的文脈を離脱しても、なおも普遍的な「ワタン」の表象として(北アゼルバイジャンにおいては)ソヴィエト時代から独立後まで生きて読まれている。その「物語」とはニザーミー像形成の事例にみるごとく、ソヴィエトの政治的動機づけありきの意識的な「創作」をも含むある種の「異形性」を含んではいたが、時代がくだって(次節のヴァハブザダにみるように)ソヴィエト後期にナショナリズム的言論への憚りが次第に薄れてゆくにつれてその「異形」が「常識」に変遷していったのは皮肉といえば皮肉である。多分に結果論的だが、ヴルグンが発信した「物語」は、1918年の共和国と異

---

<sup>33</sup> Vurğun, 5-ci cild, p.75

<sup>34</sup> Koroğlu アナトリア(トルコ)、イラン、コーカサスで広く知られる伝説の英雄、義賊。トルコ語表記の「キョロール Koroğlu」で特に知られる。名前は「盲人の息子」の意味で、名馬の目利きであった父が領主の勘気に触れ、両眼を抉り取られて追放されたことに由来する。ヴァリアントは多いが、アウトロー化して父の育てた2頭の駿馬を駆り、領主に父の敵を討つ勧善懲悪的な物語が基本として知られる。

<sup>35</sup> サファヴィー朝初代の王イスマーイール1世(1487-1524)のこと。テュルク系遊牧民勢力を重用し自らアゼルバイジャン語で詩を作っている。「ハタイ」はその詩人としての雅号である。

<sup>36</sup> Vurğun, 2-ci cild, p.48

なる新しい基軸で（少なくとも「北」で）アゼルバイジャンのワタンを具象化して創成する実効は十分に有していたと言ってよい。一般的には「ソヴィエト時代」を振り返って呪詛する傾向のある現代北アゼルバイジャン人のなかでさえ、本稿で紹介したヴルグンの作品に典型化される英雄、英傑やワタンの「栄光の過去」に対するソヴィエト時代の「物語」は、なおアプリオリなものとして生き続けていると筆者は理解している。

ヴルグンの作品にみるワタンの「物語」の要素は、次世代のヴァハブザダにも引き継がれている。同時にヴァハブザダの作品では、ヴルグンが抑えて表現した「ワタンの南北分断」という主題が、ソヴィエト後期から独立後にかけて繰り返しクローズアップされることになる。

## Ⅶ. ワタンの「南北分断」とイラン——ヴルグンからヴァハブザダへ

ヴルグンが 1956 年に世を去って 3 年後、北アゼルバイジャンでヴルグンと並ぶ国民的詩人として敬愛されるバフティヤル・ヴァハブザダが『ギュリュスタン Gülüstan』(1959 年) という詩を発表した<sup>37</sup>。表題の『ギュリュスタン』はペルシア語でゴレスターン(地名)であり、本稿冒頭で触れたゴレスターン条約締結の地である。作品は空想的にこの条約締結の場に遡り、条約をもって分断されたワタンへの哀惜の想いを直截に詠んでいる。スターリン時代を背景に、その主題に対するヴルグンの慎重さを対比すると、当時としてこの一篇は異端的といえる。

独立から数年後、『ギュリュスタン』を発表した当手を回想する短い記事を詩人自ら書いている。それによれば、作詩当時は発表しようにも引き受け先はシェキの一紙だけ、発表後には掲載誌の編集長に譴責の通告を受けると同時に作品はアゼルバイジャン共産党中央委員会でイデオロギー担当書記から容赦ない批判を受けた。一時期は作品の出版、放送を止められ誹謗中傷に晒される不遇をかこった。この回想記事で自ら問題作『ギュリュスタン』について、次のように述べている。

イランのシャーたちの血塗られたレジームと、偉大なレーニンが「諸国人民の牢獄」

---

<sup>37</sup>ヴァハブザダについては、石井啓一郎「アラス河の北と南で~ふたりのアゼルバイジャン語詩人とそれぞれのヴァタン (Vətən)」原隆一、中村菜穂編著『イラン研究万華鏡』大東文化大学東洋研究所、2016 年、pp.3-32、同「南コーカサスからのスケッチ——アゼルバイジャン文学への誘い」、中東現代文学研究会編『中東現代文学リブレット 1 シンポジウム「トルコ文学越境」』中東現代文学研究会、2017 年、pp.26-47 を参照。

と名付けたツアールのロシアによって、我らのワタンを二つに引き裂いた植民地主義政治 (müstəmləkəçilik siyasəti) を白日のもとに曝け出すものであり、民族の自由への想いを基盤に書いたこの作品なのに、あの時代、いかなる理由で非難と迫害に曝されたのか、私にはまったく理解できない。<sup>38</sup>

筆者は未だ網羅的にヴァハブザダに関する同時代のクリティークを辿っていないが、1975年<sup>39</sup>にはヴルグンと同世代でやはり北アゼルバイジャンで敬愛される詩人ラスール・ルザ (Rəsul Rza 1910 - 1983) がヴァハブザダを一篇の評論で次のように称賛している。

世紀の苦い情熱の道を往き、行進の先頭にたち、みずからの意思で目にしたもの。それは靈感溢れる心の鼓動とともに過ぎた幾多の眠れぬ夜、民衆、そして「ワタン」。彼が識った動揺、彼が感じた愛情、その嘆かわしい日々。すべては何人も分かつことを得ぬ幸福なのだ。<sup>40</sup>

ルザはここでヴァハブザダを「ワタン」と人々の愛を勝ち得たと評している。『ギュリュスタン』への直接の言及はないが、ヴァハブザダを「ワタンの詩人」と評したとき、それは1960年代に政治問題化する危険を冒してまで南北分断への慟哭のメッセージを発した問題作へのオマージュであると考えても決して無理はなからう。断言するのは慎重であるべきだが、ポスト・スターリンの時代にこのような「問題作」を発表し苦境に立たされはしても、事実ヴァハブザダは生き延びて且つ、彼には「批判を受ける自由」が存在した。そして存命中に——しかもソヴィエトが存続しているうちから——このような賛辞を受けていたことは興味深い。

既にソヴィエト時代から民族主義的な言葉を遠慮なく発しつつけてきたヴァハブザダは、民族的な主題に関わる言動はかなり直情的である。例えば1961年に、1933年からスターリン死去の1953年まで20年にわたってアゼルバイジャン共産党第一書記の任にあり、アゼルバイジャンにおける粛清時の虐殺を主導した罪に問われて1956年に処刑

---

<sup>38</sup> Bəxtiyar Vahabzadə, *Şənbə gecəsinə gedən yol*, Azərbaycan Dövlət Nəşriyyatı Bakı (1991) pp.331-2.

<sup>39</sup> ここで詳細に立ち入る余裕はないが、「ソヴィエト崩壊後の民族共和国独立への準備期間」としてのブレジネフ時代 (1964-82) の意義については宇山 前掲論文、p.27

<sup>40</sup> Rəsul Rza, *Seçilmiş Əsərləri*, 5-ci cild Öndər Nəşriyyat Bakı (2005) p.192

されたバグロフ (Mir Cəfər Bağırov 1896 - 1956) を、民話「マリク・マンマドリ」に登場し主人公を裏切って井戸の底に広がる暗黒の世界へと突き落す卑怯な兄たちに擬え、一応にも命をもって罪を償ったはずの死者に対しても、民族同胞の裏切り者と容赦ない断罪の言葉を詠む<sup>41</sup>。

ヴァハブザダが上の引用でイランのシャーたちを「血塗られた qanlı」暴力的存在として批判の俎上に乗せるとき、それは 19 世紀の条約の政治外交的責任者たる当時のシャーを指弾するより、むしろガージャール、パフラヴィー両王朝下で「ペルシア語を押し付け、アゼルバイジャン語を奪ってきたイランのショーヴィニズム」への嫌悪である。

『ギュリュスタン』は、北アゼルバイジャンの歴史認識で「アゼルバイジャンの統一と独立のために闘った」とされる 3 人の南アゼルバイジャン人に捧げられており、その中に 1946 年に南アゼルバイジャンでアゼルバイジャン民主党として反中央的な自治要求を先鋭化させて敗北したミール・ジャーファル・ピーシェヴァリー (ペルシア語 Mir Ja'afar Pīševārī, 1892 - 1947) が名状されていることを見れば、詩人が「条約がもたらした民族分断」を同時代の事件の隠喩として、同胞へのイランの弾圧と虐待を糾弾する意図を見るのは自然であろう<sup>42</sup>。アゼルバイジャン独立後、詩人は『ギュリュスタン』から 40 年を経た続編として『独立 İstiqlal』(1999 年) を作詩し、南北統一が未完のままの北の独立を嘆くが、その詩には「母語を奪ったイランの抑圧」への怨恨の直截な言葉が並んでいる<sup>43</sup>。

## VIII. 結びにかえて

本稿では主として北アゼルバイジャンでソヴィエト時代に形成され、独立後も受容、承継されているワタン像を文学作品のなかに求めてきた。「ペルシア主義の下で母語を剥奪され、アラス河で同一民族のワタンが分断されている」といった歴史認識、またペルシア語古典文学の大詩人ニザーミーの「アゼルバイジャン国籍化」などのファクターのいずれも、アゼルバイジャンが常に意識せざるを得ぬイランの存在感が大きく影響していると言える。夢想的な「願望」の要素も含めた「物語」には、地域におけるイランの

---

<sup>41</sup> Bəxtiyar Vahabzadə *Qeybdən Səs*, Araz Bakı (2014) p.28

<sup>42</sup> 本作が捧げられた残りの 2 人は、イラン立憲革命時にガージャール朝のシャーが起こした反動クーデターに抵抗してタブリーズの包囲戦 (1908 年) に勝利したサッタール・ハーンと、同市で自治運動を主導して敗死 (1920 年) したヒヤーバーニーである。

<sup>43</sup> 石井「アラス河の北と南で」pp.8-14.

文化的な存在感から自らを切り取り、その独自性の認知を得たいと強い意識が感じ取れる。自らの独自性を「イラン・ペルシア」から異化したいという願望は「南北」に程度の差はあれど、基本的には共有されている要素である。

しかし南アゼルバイジャンを簡潔に一瞥すれば北の呼びかける「ひとつのワタン」論に広く共感が得られているかと言えば、現時点で文学の視点から肯定的な答えはない。例えばタブリーズ生まれでペルシア語現代詩人としてイランで敬愛されると同時に、南北アゼルバイジャン語文学の共有財産的存在とも目されるシャフリヤール（ペルシア語 Mohammad Hoseyn Shahriyār, 1906 - 1988）の創作に目をむけると、その膨大なペルシア語詩は先ず非政治的で抒情的、ロマン的な作風が顕著だが、1979年のイラン革命と続くイラクとの戦争の時も含め「イラン国民」としての愛国意識を一貫して堅持している。他方アゼルバイジャン語詩の領域で、自らの詩作をもって「トルコ語」（アゼルバイジャン語）の創造性と独自性の証を立ててきたのは、まさにイランにおける「知性の闘争」<sup>44</sup>の実践であり、「《トルコ語》が小さな泉なら、わたしはそれを海にした」<sup>45</sup>のような確かな自負を映す詩句も多い。それは「イランというワタン」のなかで母語や民族文化的独自性への権利を求める闘争ではあっても、「北」と合流する形の新たなワタンを希求した証跡を筆者はまだ彼の作中に認めていない。付記すれば、イラン革命の約2年前、アゼルバイジャン語詩『時の声 Zaman Səsi』（1976/77年）に彼はイランの来るべき変革を喝采すると思われる予言的な言葉を綴ってもいる。

本稿は領域、言語、民族性に則して主として北で形成されたアゼルバイジャンのワタン像を、文学者の言葉を直接の典拠として描画するささやかな試みである。それは未だ作業仮説にとどまりなお検討を要するが、現時点で結語とするなら「アゼルバイジャン」というワタンは決して自明のものではなく、南北で異なる基層のうえに成り立つ想念のなかの存在と言えよう。

---

<sup>44</sup> Məmməd Rəfimanifər *Şəhriyarla Birlikdə Özgələşməkdən Özləşməyə Doğru* Tabriz AH1392 [2015/6] p.56

<sup>45</sup> Mohammad Hoseyn Shahriyār *Kolliyāt-e ash'ār-e torkī-ye Shahriyār*, Enteshārāt-e Negāh Tehrān AH1394[2015/6] p.231